

第 I 部 基調講演・記録

1 開会式とイントロダクション（2011年10月5日 午前）

〈村本邦子〉 你好我叫村本邦子，很高兴来南京。みなさん、こんにちは。立命館大学の村本邦子と申します。また南京に来ることができて嬉しく思っています。

これから「国際セミナー南京を思い起こす 2011」を始めます。張先生はじめ、中国の先生方、学生さんたちにいつも温かく、私たちがここに来ることを許し、受け入れ、また、来ることを助けて頂いていることに心から感謝しています。言葉で尽くせないほど感謝しています。

このセミナーは、アルマンド・ボルカス先生の「歴史のトラウマを癒す」という手法を使って行っています。2009年のセミナーもそうでしたが、今回は、プレイバックのフレンズさん、AZ さんのご協力を得て、「プレイバックシアター」という新しい要素を加え、新しいチャレンジもします。

2007年、2009年、2011年と、対話を続けていく中で、相互の理解や交流が深まっていくこと、そしてそこから何か新しいものが生まれ、育っていくことを願っています。今回のセミナーは、日本政府の科学研究費の助成金を得て実現が可能になりました。ささやかな試みですが、続けていくことで、平和を願う気持ちが広がっていくことを祈っています。4日間どうぞよろしくお願いします。

〈アルマンド・ボルカス〉 こんにちは。私の名前はアルマンド・ボルカスです。私はアウシュビッツ収容所の生存者の息子として生まれました。私は、カリフォルニアで、自分に伝えられてきたものの意味を明らかにしようと試み、自分が受け継いできた遺産から、歴史の痛みを癒すというプログラムを作り、国際間の紛争や、集団的なトラウマというものを癒す方法を考えてきました。

このワークでは、いくつかの問いを皆さんに投げかけます。まずひとつは、私たちが受け継いできたトラウマをどうやって癒しに変容することができるかということです。私たちに取り憑いている歴史の亡霊を未来の世代に受け継がせないようにするために何ができるのでしょうか。私は、芸術にこそ、トラウマを何か積極的なものへと変容する力があると信じています。そしてそれが、こ

の4日間、私がみなさんと一緒にやっていきたいことです。

張先生、このイベントを温かく受け入れ、準備してくださってありがとうございます。そして村本先生、この3人目の子どもと呼びましょう、それが生まれるのを手伝ってくださったことを感謝しています。この後、張先生がなさる講演の中でプレイバックシアターの皆さんに実演してもらいます。プレイバックがどのようなものかご存知ない方もいらっしゃると思いますので、彼らを先に紹介しておきたいと思います。



右からボルカス先生、村本先生、羅先生

〈傳宏〉 みなさん、よくいらっしゃいました。私は南京師範大学教育科学院副院长をしております傳宏です。今回、ここでみなさんと一緒にこの活動に参加することができて嬉しく思います。このイベントはとても意義深い活動だと思っています。私は心理学研究者であり、研究課題のひとつは「ゆるす」ということです。人と人とは、昔の傷を捨てて、平和に付き合っていくことが大切だと思います。

今回の活動にとても期待しています。今回の活動を通じて、これからどのようにうまく平和に付き合っていくかという示唆を得たいと思います。そして、もっと協動的に付き合っていけることを期待しています。

もう一回、みなさんに感謝の気持ちを表します。もし南京が初めての方であれば、今回の活動を通して、また夜の時間に南京全体を歩きながら観光してください。それだけでも平和のための活動のひとつではないかと思います。ありがとうございました。

〈金一虹〉 私は、南京師範大学金陵女子学院の金一虹と申します。今回のイベントに参加させて頂くのは、ひとつには勉強だという気持ちからです。もうひとつは、ずっと抱えている疑問がありまして、この疑問をもって参加させて頂きました。私は戦後生まれですが、しかし両親は戦前、軍人でした。戦争に参加したことがあったのです。

中学生の頃、私は、北京で、中日政府が催した中日の若者の友好活動に参加しました。その時、両国の政府は、若者の中に平和という言葉を広げていこうという理念で活動を催していました。そして、張連紅先生の支持を得て、昔、南京大虐殺の中で起こった性暴力の心理についての研究をやってきました。

私がいま仕事をしている金陵女子学院という場所は、南京大虐殺の起こった時に、女性や子どものための安全保護区となっていました。私は今そこで仕事をしています。私の自己紹介を通じて、みなさんにも私の心にある葛藤が見えてくるかもしれませんが、歴史が残してきた葛藤がずっと私を苦しめています。歴史が残してきた矛盾や葛藤をいかにして解決していくのか、そういう難題を抱えて苦しんでいます。

今回のセミナーの趣旨は、まさに戦争の残してきたトラウマをいかに解決していくかということです。これは私が心から期待しているものです。解決できるような打開策があればいいなと期待しています。今回の素晴らしいイベントを催している先生方に感謝します。

〈金丸裕一〉 みなさん、こんにちは。立命館大学から来ました金丸です。私の専門は歴史学です。大学時代からずっと研究していますが、最初は歴史学と心理学は全然関係のないものだと思っていました。私は1962年生まれです。もうすぐ50歳ちょうどです。戦争の体験はないけれど、しかし私の父も戦争を経験していました。

父は、中学生の時に、中国の満州を開拓する志をもっていたようです。しかし、父の先生が許しませんでした。それでも、やはり戦争の体験を持っている。母も戦争体験を持っています。両親と私の年の差は20歳から30歳くらいです。私は戦争を研究するために、戦争当時の資料を見てきました。資料を見ているうちに、私にはだんだんと事実が見えてきたのです。父の時代、また祖父の時代の人々がたくさんの中国人を殺してしまった資料を見てきたのです。そういう資料を見ている間に、とても怖くなってきました。心がとても揺れています。

歴史学は力を持っていますが、しかし限られています。心理学も力を持っています。私の考えでは、私たちの世代では中日の間にある問題を解決できないかもしれません。中国のほかにも、北朝鮮と韓国の間にもそういう解決できない問題があると思います。しかし私は、今の若い世代、大学生、院生に期待しています。4日間は短いですが、この間に示唆や啓発を得るかもしれません。とにかく、私たちは協力し合って、中日の平和のために努力していきましょう。

〈村川治彦〉 こんにちは、村川治彦と申します。2007年にこちらで張先生と一緒に「南京を思い起こす」という会議を開かせて頂き、それ以来こうやって、4年ぶりなのですが、またここに来れたことをとても嬉しく思います。

日曜日に来たのですが、この3日間で印象に残ったことが3つあります。一つは、昨日、中山陵に行って、改めて実感した中国の歴史の広さと深さ。それから、昨日の夜に、張先生がレストランに来てくださって、がっしりと握手してくださった時の手の感触。それから、今朝、日本人たちと南京大虐殺記念館に行ってきたのですが、そこで見た生存者の一人一人の顔写真。2度と僕たちが愚かなことをしないための3つの教えだったと思っています。

〈小田博志〉 遅れて参りました。小田博志と申します。南京と、あるいは中国と日本の関係について、本当に自分自身が振り返るというのは、恥ずかしいことなのですが、最近のことです。私は、今、北海道大学というところで働いてまして、ヨーロッパにおける戦後の民族の和解を研究テーマにしています。

たとえば、ナチスドイツがユダヤの人たちをはじめとする人たちに大量の虐殺を行いました。いわゆるホロコーストです。そういう戦争に関わる破壊と犯

罪行為によって、多くの人命が行われ、物質的な破壊も行われました。しかしそれだけではなくて、戦争が終わった後、人と人との間に巨大な溝が残されたのです。その溝の間に橋をかけて、再び人と人とのつながりを取り戻す、これが和解という仕事だと思っています。

この和解の仕事については、ドイツをはじめ、ヨーロッパの中で様々な試みがあって、これまでそれを私は研究してきました。その一つの団体を調べているときに、村本さんのお名前をお聞きし、そして3年前だったと思うのですが、その団体の事務局長を招待してシンポジウムを開催したときに、実際に村本さんにお会いしました。

ヨーロッパで調査をする中で、はたして足元の日本、アジアでは何があったのだろう、そしてその歴史を踏まえた和解について、いったいどういうことが行われているのだろうということを、あまりにも知らないことに気付いて、これはいけないと思って、数年前から、韓国・中国を訪れて、自分の目で見るようにしています。

たとえば、チェコのある町で、ナチスドイツがその住人ほとんどすべてを殺すということが戦争中行われました。2年前にその町の跡を訪れたとき、同じような話を聞いたことがあると思って思い出したのが、中国東北地区の平頂山でした。そこは去年訪れました。

また、私の祖母の弟が軍人として中国に来ていて、上海で従軍していたということを、今年の8月、里帰りしているときに初めて聞きました。それ以上のことはその時、聞けませんでした。さきほど南京大虐殺記念館に行って、上海でも日本軍の虐殺行為が行われていたことを知り、改めて祖母の弟に今度里帰りしたときに、戦争の話を聞こうと思いました。

南京に来たのは今回が初めてなので、みなさんとともに謙虚に歴史について学び、日本と中国の間に橋を架けられる、そのための助けになるような仕事をしたいと思っています。ありがとうございました。

〈笠井綾〉 初めまして。私の名前は笠井綾です。私は2007年のイベントから参加しています。現在は、カリフォルニア統合学研究所というところの博士課程で表現芸術療法の勉強をしています。私はセラピーの勉強をしながら、表現

がどのように心の癒しになるかということにとっても興味を持っています。

私の母方の家族は広島の被爆者が多くて、父方の家族は戦争中に中国にいました。祖父は憲兵でした。原爆のことについてはたくさん話を聞いたり、学んだりしましたが、憲兵だった祖父は私に何も伝えてくれませんでした。私は何も知りませんでした。

初めて南京にきて、日本軍がどのようなことをしていたか、自分の目を見て、話を聞いて確かめることは、私にとってとても大切な体験でした。とても重い歴史なので、学んでいると苦しい思いが湧き上がってくることがあります。

そのときに助けになったのが、一緒にワークをした中国のみなさんや日本人の仲間の存在だったり、芸術をいろいろ使ったり、童話のエクササイズを使うことでした。人間は皆、芸術やアートを昔から癒しや儀式の為に使ってきました。ドラマセラピーや、表現芸術療法は、わりと最近、アメリカなどでは多く臨床の現場で使われるようになっていますが、それを中国や日本の方と一緒にするとき、どういう風に変えたらやりやすいのかなということにとっても興味があります。

今回みなさんがいろいろなことを体験してくださると思うのですが、そういったお話をまたいろいろ聞かせていただきたいと思います。4日間よろしくお願いします。



張連紅先生

南京を思い起こす：負の遺産を共有財産へ

張連紅

南京師範大学

これからみなさんに南京大虐殺について少し紹介させていただきます。今日の講演はとても挑戦的なものだと考えます。何故かという、ひとつはこうした報告については2009年に一度行ったことがあるもののまだまだ経験不足です。もうひとつは、今日来て頂いた皆さんの中には、歴史学だけではなく心理学、また関係するほかの学部の先生と学生もいらっしゃると思います。歴史学、心理学、その他関連する学問をいかにしてひとつのものとして接点を見出して報告するか、これは私にとってとても難しいものです。

昨夜村本先生やアルマンド先生に依頼されてから今まで、私は何を報告するかをずっと考えてきました。やっと考えついたのが、「南京を思い起こす：負の遺産を共有財産へ」というテーマです。私は2つの報告をしようと思っています。まず南京大虐殺後、中国人がこの虐殺をどのように見てきたかについて簡単に紹介させていただきます。大虐殺の後、中国人の虐殺に対する考えを私なりにまとめると、3つの段階に分かれていると思います。

1. 南京大虐殺の記憶の3つの段階

第一段階は虐殺発生から抗日戦争の8年間です。虐殺発生直後、虐殺の中心地から外に逃げ出したメディアのジャーナリストたちの報告です。当時、中国の軍隊の中で、1冊の本が伝えられました。南京大虐殺についての本は、H. J. ティンパーリー（H. J. Timperley）が編纂した『外国人が目撃した日本軍の暴行』というものです。その本が中国の軍隊の中で広く宣伝として使われたようです。対日抗戦の8年間、中国人の記憶の中で、虐殺のことは、日本軍に抵抗するための気持ちを奮い立たせるためのものでした。すなわち、南京での日本軍による残虐行為を記録することは、日本の侵略に対し、中国兵士と民間人を激励するための重要な精神的なアイテムだったのです。

しかし、その後、1945 年、すなわち戦後、蒋介石は国民に対して「以德報怨」というスローガンを示し、過去は赦そうと宣伝したのです。蒋介石は、南京大虐殺について広範囲の調査を行ったにもかかわらず、大虐殺に対して寛容な気持ちを持つという趣旨をもって、東京裁判、また南京裁判を行いました。とにかく、戦争犯罪者をなんとか許そうという趣旨の下で裁判を行ったのです。ですから、東京裁判と南京裁判で裁判した戦争犯罪人の数はとても少なかったのです。

その後、1949 年、中国共産党の設立した中華人民共和国でも、日本の昔の戦争犯罪に対する態度はやはり寛容の態度を持っていました。事実としては、1949 年から 1982 年まで、中国政府は中日関係に対して、中日人民は友好的な関係であるという態度をもってきました。そして、南京大虐殺は日本のごく一部の軍国主義者がやったもので、日本の人民大衆がやったものではないという考えを、中国政府と中国人はずっととっています。中国政府は南京で大虐殺を行ったのは少数のファシスト軍国主義者であり、普通の日本人ではないというように区別したのです。

ですから、1972 年に中日両国の国交が回復し、友好に向かっていこうとするときに、南京では大勢の大虐殺の生存者が中国政府に抗議したのです。しかし、その時の中国政府は、さまざまな方法で、南京大虐殺の生存者の抗議を圧迫したのです。中国政府は大所高所になって「中日関係は未来における友好のための関係」と唱導してきたのです。要するに、1945 年から 1982 年まで、蒋介石の国民政府でも、共産党の中華人民共和国政府でも、とにかく中日関係への態度は、寛容な許す態度を持ち、罪行を忘れ、未来の平和のために努力していく態度を伝えてきたのです。

ところが、1982 年日本の教科書事件から現在まで、南京大虐殺について中国国民の記憶のありかたに大きな変化が生まれました。なぜかと言うと、日本の右翼や教科書事件、南京大虐殺の事実を否定する活動が、メディアによって大量に報道され、中国国民特に南京市民が知ってから、大きな反発の気持ちが湧いてきたのです。そういう背景のもとで、南京や、また他のところの大虐殺生存者たちは、日本政府に対して賠償の要求をしたのです。1985 年、一般市民の呼びかけのもとで、南京大虐殺記念館が作られました。そして、現在多くの中

国の若者が日本を憎む過激な行動をとるようなことが頻繁に起きるようになったのです。

この 20 年間、日本についてのネット上の評価を見れば、一般市民の南京大虐殺の記憶についての変化は非常に大きいものがあることがわかります。別の観点から見ると、南京大虐殺は中国人が非常に重い傷を負わされたという記憶の印となっています。南京大虐殺は、南京市民だけではなく、日本が中国に侵略し中国人民を虐殺した暴行の最大のシンボルになっていると言えるのです。

以上、中国の人々の南京大虐殺に対する記憶の変化を簡単に紹介しました。すなわち、第一段階は 1945 年までの 8 年間、第二段階は 1945 年から 1982 年まで、第三段階は 1982 年から現在までです。この 3 つの段階があるのです。

2. 歴史学の研究における変遷

次に、歴史学において南京大虐殺がどのように認識されているかを紹介したいと思います。1982 年までは、ほとんど学術的な視点からは南京大虐殺の研究は進んでいませんでした。この 30 年を振り返ってみると、南京虐殺についての中国の歴史学者の認識は 2 つの段階に分けることができると思います。

第一段階目は 80 年代から 2000 年までです。この時期の研究は、ほとんど、南京大虐殺は事実だということを証明する研究でした。その理由は、当時、日本の右翼の研究者が「南京大虐殺とはでっちあげで、そういう事件はない」という否定論を提示したことに対して、中国の学者は「あった」ということを証明するために仕事をしてきたのです。研究の表現形式からいえば、非常に対立性の強かった時代でした。

中国では、南京大虐殺では被害者は 30 万以上ということを証明することが研究の中心でした。その時のポイントは、日本軍の残虐なやりかたを摘発することにあります。したがって、その表現には、感情的なものが多かったのです。研究成果から見て、資料が少なく、論点が多いということがその時代の特徴でした。当時の中国の歴史分野では、そういうときの研究の特徴に「以論代史」という名前をつけました。「以論代史」とは、歴史資料の代わりに論点を主張することです。論点をまず立てて、その論点に基づいて資料を探すというのが、その時の研究の特徴でした。

もうひとつの特徴は、戦争被害者という立場に立って研究することが多かったということです。当時の研究成果、論文だと、仮に著者の名前を取り去って英語に訳して、英語を使う人にこの論文は誰が書いたものと尋ねても、きっと中国人が書いたものだと思われるようなものでした。すなわち論文の作者の立場の色彩が濃いという特徴がありました。

しかし、2000 年以後、私の考えでは、歴史学分野では南京大虐殺に対する研究の雰囲気が大きく変わりました。ひとつの大きな変化は、南京大虐殺研究において、資料の事実のポイントを置いたことです。2000 年から、南京大学の張憲文先生の主催で、南京師範大学、南京大学、および南京にある科学研究所の研究者が歴史資料の収集、証明、翻訳、出版に力を尽くしました。その収集成果として、2011 年 6 月までに、全巻で 5000 万字にも上る 72 巻の南京大虐殺資料を出版したのです。72 巻の中には、中国の資料だけでなく、日本からもたくさんの資料を収集しましたし、アメリカ、ドイツ、イタリア、世界各国から南京大虐殺に関する資料を収集しました。そういう膨大な歴史資料を踏まえて、今の歴史学部の研究者の視野も考えも変わってきたのです。

まずひとつに、学者たちは、資料を踏まえて自分の論点をまとめます。資料を踏まえて研究をするので、彼らの研究はより客観的になっていると思います。その中には日本の立場から見る資料もあります。日本の立場に立つ資料も排除することなく、客観的にいろんな視点から歴史の事実を研究するということが普通になってきています。したがって、今の南京大虐殺の研究もより客観的で理性的になっています。研究論文のテーマもさまざまになって、大きく変わっています。南京大虐殺の被害者の人数が 30 万人とか 20 数万とかについて論じる学者は、今はほとんどいません。そして、中国の学者は日本の右翼、否定派の発言を重視せず、既に「対立的研究」の範囲を超えました。多くの学者が中国人という意識を超えて論文を書いています。ですから、今の学者の論文を見ると、作者の名前を取り除いてみたらその論文の著者が中国人かどうかわからなくなりました。今の学者の視点は、高い視野から様々な視点にたって、南京大虐殺のような暴虐な行為を反省するようになってきたのです。

今、中国の、とくに南京大虐殺についての学者の視点は、国を超えて、人類という視点に立って、いかにして戦争による虐殺を避けることができるかという

ことを考えるようになったのです。被害者は誰か、加害者は誰かという研究をするよりも、戦争が人類にもたらす災難をどうやって避けるかということに変わったのです。これはとても素晴らしいことだと思っています。さらに、被害者・加害者という立場を超えて、歴史のトラウマを癒すという視点を皆が持っていたら、皆の努力で歴史のトラウマを癒すことが可能になるのではないかと考えています。この視点から見れば、これからの歴史学の研究は、和解を実現するうえでとても大切な役割をになうと思います。わたしたちはこれからも努力を続けていきます。中国の歴史学界はこの10年でとても大きく変わりました。それは、日本の多くの学者との協力があったからこそです。在席の金丸先生、また笠原先生などの歴史学者の協力が私たちのこれからの和解のための研究にはとても素晴らしい力になると思います。歴史学の研究が、時空をこえ、身分や民族をこえ、人類の共通点に立ち、こうした暴虐な行為をいかにして防ぐことができるか、そこにこそ関心があります。

3. 心理学の視点から、いかにしてトラウマを癒すか

三番目は、心理学の視点から、いかにしてトラウマを癒すかということです。私は今まで、多くの大虐殺の生存者を調査してきました。ですから、私個人の考えから言えば、心理学の角度から戦争のトラウマを癒すことは、一刻も早くしてもらいたい気持ちです。これまで数百人の生存者を調べ、彼らのトラウマが深いことを痛感しています。しかし、私は歴史学者なのです。彼らの苦痛、彼らの不幸、トラウマを見て、自分が無力であることを痛感しております。

私はこれまで、多くの日本の学者や民間人と接してきました。そして、被害者だけでなく、日本の旧軍人や普通の人々の身にも、心の傷の影響が残っていることを痛感しています。私は、1999年に初めて東京の会議に参加しました。その時、会場で仕事をしているボランティアたちに、是非中国へ来てくださいと声をかけました。「南京はとても怖くて行けないです」と、誰からもほとんど同じ答えが返ってきました。この考えは、多くの日本人の心の中にあるのではないかと感じています。2009年にここで同じ会議を開催しました。イベント後の報告書を見ると、日本の学生の参加者の感想の中に、同じような心配が書かれていました。ただ、来てみると、心がとても穏やかになったと彼らは感じた

ようです。

旧日本軍人が年を取り、今、2種類に分かれていると思います。1種類は、中国でやった悪いことをとても後悔して、今、謝罪する気持ちを持っています。しかし、もう1種類は、靖国神社で見るような軍服を着た人々です。彼らには謝罪の気持ちがなく、昔したことを後悔する気持ちのない旧日本軍人です。靖国神社の周辺で見られる人たちは、自分の過去を誇らしく思い返しているのでしょう。まったく正反対のタイプですが、みな、戦争が彼らの心に残したトラウマだと思います。私は、この南京師範大学に、3人の旧軍人を招待したことがあります。彼らは昔のことについてここで話しました。

3人の中に、本多立太郎という方がいます。彼は千回以上報告しました。もう一人は東史郎さんです。ここで学生にいろいろと報告しました。もう一人は、皆さんご存知の大江健三郎さんです。ノーベル文学賞の授賞者ですが、ここで私たちと対話しました。彼の作品の中の一部を私は読んだことがあります。広島原爆についての作品です。彼がここに来たとき、加害国としての立場で、私たちと深く交流し、また対話しました。

また、こういう老人に会ったこともあります。彼は定年になってから、南京に来て、ひとつの企業を興したのです。彼は無償でステンレスの技術を伝えようとして、この企業を興し、いろいろやっています。しかし、そういうことをやっている間に、百万円だまし取られたのです。彼は、「昔悪いことをやったから、報いだな」と思ったようです。

昨日の新聞記事に、こんな記事がありました。中国で「南京大虐殺」という映画が上映されたことがありましたが、その映画の中で松井石根の役を演じた日本の老人久保恵三郎さんが、昨日、南京大虐殺記念館へ行って、そこにあった中国の女性の石像に向かって、長い間、跪いて謝罪したのです。この石像の女性は、おととい、10月1日に亡くなったのでした。彼は、彼女の石像に哀悼の意を表して謝罪したのです。

実は、謝罪の気持ちから、中国のためにいろいろなことをやった例は多いのです。ここでは、それをいちいちあげませんが、そういうことを見て、考えることは次のことです。南京大虐殺は74年前に起こったことですが、あの事件後に残ったトラウマは、今もずっと人々の中に残っている。これらの事実から

歴史を証明することもできるのではないかということです。そして、そういう人々のトラウマを見て、私たちは何をすべきか、何をやらなければいけないかということを考えなければならないのではないかと私は思います。

最後に、ひとつの疑問を皆さんに投げかけたいのです。戦争のトラウマを癒すこのワークショップは、規模も小さく人数も少ないですが、今直面している問題は巨大なものです。今後私たちは、いかにしてこの巨大な問題を解決していくのか。今回のワークショップの一番の仕事は、直前のプレイバックの通りです。相手に対面するとき、彼や彼女の眼を見て、日本人が、中国人が、ではなく、彼は、彼女は、人間だ、と、素直にお互いの眼を見つめあったらいいのではないかと思います。この4日間、皆さん、一緒に、まさにプレイバックのように、表現されたものを共有していこうとする気持ちが大切だと思います。



プレイバック

3 生存者・夏淑琴さんの証言

1937年のとき、私は8歳でした。南京城内の新路口に9人家族で住んでいました。もともと、そこには8軒の世帯と一緒に住んでいましたが、6世帯は市外へ逃げてしまったので、私の家族ともうひとつ、隣のおじいさんの家族の2世帯が残っていました。

日本の軍隊が入ってきたとき、とても怖く感じました。へんな帽子をかぶって、銃の先の剣が光っていて、とても怖かったんです。兵隊たちは家に入ってきて、父を銃殺し、それを見て逃げようとしたおじいさんも殺されてしまいました。

みなは机を並べて作った防空壕の下に隠れたんですが、日本軍が入ってきて、母と妹を引っ張り出して、妹を庭に放り上げ、そのまま殺したのです。そして、母の服を全部はぎ取って、悪いことをしました。隣のおばあさんは背も高く太っていて、いくら引っ張り出そうとしても出せなかったのです、そのまま銃で刺し殺しました。

このそばで、私と 3 人の姉と、もうひとりの妹が裏の部屋に隠れていました。おじいちゃんとおばあちゃんは私たちを守るために一生懸命でした。私たち 4 人をベッドの上にのせて布団で私たちを隠したのです。日本軍が入ってきて、そのまま銃剣で、おじいちゃんとおばあちゃんを刺して殺したのです。ベッドはひとつですけれども、おじいちゃんはこっち、おばあちゃんはこっち、左と右に 2 人は倒れて死んだのです。

日本軍は、おじいちゃんとおばあちゃんを殺して、布団をはいで、一番上の姉を引っ張りだしました。私はこの目で見たのですが、彼らは姉を机の上に投げ、銃剣で姉の服を刺して破ったのです。そして、そのまま悪いことをしました。そして、2 番目の姉をベッドの上で押し倒して、また銃剣で服をとって、悪いことをしました。そのとき私は 8 歳でしたが、なんとかわかるのです。悪いことをしていることが。わたしは 2 番目の姉をつかんで、一生懸命叫んだのです。でも、日本人の手は止まらなくて、私は叫んで暴れていますので、日本軍に銃剣で 3 発刺されたのです。そして、意識不明になりました。

目が覚めたら、体中血まみれでした。裸で、靴もズボンも足にも血が流れていたのです。一番下の妹はそのとき 4 歳でした。彼女は布団の一番下に隠れていたので見つからなかったようです。妹も泣いていました。私は 8 歳、妹は 4 歳なのですね。私はしょうがなく、ベッドの上にいる 2 番目の姉を揺らしたのですが、全然動かなかったのです。姉も裸でした。裸にされて強姦されて死んでしまったのです。一番上の姉も揺すってみましたが、彼女も全然動かなかったんです。やはり裸で、机の上に横になっているのです。そのとき一番上の姉は 15 歳、二番目の姉は 13 歳でした。彼女たちの死んだ悲惨な場面は、いつまでも私の頭に焼き付いているのです。2 人の姉たちが若いのに強姦されてそのまま死んでしまったことに、今でも心がとても痛んでいます。

妹は泣き叫んでいますから、私は前に進んで、おじいちゃんを揺すったり、お

ばあちゃんを揺すったりしてみました、みんな死んでしまっていました。本当にどうしょうもなく、妹と抱き合って泣いてしまいました。私は銃剣で3発刺されたので、体中がとても痛くてたまらなくて、血まみれになって、とても歩けないのです。でも、妹はわからずに、「おなかすいた。おかあちゃん。おかあちゃん」と泣くので、しょうがなく、私は這いながら部屋の外に出たのです。でも、そこにも死体がいっぱいでした。みんな死んでしまったのです。おじいちゃんもおばあちゃんも死んで、おかあちゃんも死んでいました。庭に出てみたら、小さい2歳の妹も死んでいました。お父さんも、隣のおじさんもみんな死んでしまって、シーンとしていて、誰も生きていませんでした。

妹が「おなかすいた」と泣くので、私はコゲの缶を探しました。1937年、あの朝まではずっと飛行機が毎日のように爆弾を空から落としていたので、普段からおかあちゃんは、いざという時のために、ごはんのコゲをすこしずつ残して、缶の中に入れておいたのです。コゲは固いですから、食べるときに水瓶にある冷たい水を少しかけるのですが、昼間は怖くて水をとることができませんでした。日本兵が庭から近いところに留まっているらしく、ときどき庭を近道として通るのです。彼らの革靴の足音を聞くと、私と妹はびくっとして全然声を出せないのです。昼間はとても動けないのです。夜、少し這い出して、とって食べるのです。私たちは、机の下で背が高く太ったおばあさんの死体の後にずっと隠れていました。

私の心の中には、期待がありました。私のおじさん、母の弟ですが、おじさんの奥さんが妊娠していたので、日本軍が南京に入る前に、おじさんはおばさんを連れて安全区に逃げたのです。おじさんは自分の奥さんを安全区に連れて行ってから、戻っておじいさんとおばあさんを連れて行こうとしたのですが、安全区の外国人から「外に出てはいけない」と言われ、おじさんとおばさんはずっと安全区にいたのです。そのまま10日間待っていましたが、おじさんは来ず、食べ物もなくなっていました。その時、幸い、老人が入ってきました。南京にある老人施設に住んでいる人でした。虐殺のあと、日本軍は老人たちを外に追い出して死体を探させたのです。彼らは私たちの家にもやってきました。一回目は私たちは怖くて声が出せなかったのです。二回目に来たときに、私は南京のおじいちゃん、おばあちゃんたちだとわかって、私は這い出したので、

彼らが私たちを見つけたのです。彼らは、私たちを老人施設に連れて行ってきて、しばらく一緒に生活しました。

老人が私を着替えさせようとして、血だけではなく、10日も経ったので傷が炎症を起こしていました。「こんなにひどくて痛くないの？」と聞かれましたが、「全然、痛みを感じないの。おじいちゃんのことや家のことばかり考えているから、痛みなんて全然関係ないんです」と答えました。老人たちは、膿をとって、綿入れからとった綿を火で燃やして、その灰を傷口に入れました。そして、わずかのおかゆを分けてくれました。そのとき私は8歳なのですが、やはり物事はわかるのですね。「私と妹は少し食べたらいいです。みなさんもお腹すいてるから、私たちのために節約してくれなくていいよ」と言いましたが、老人たちは、自分たちは我慢して、私たち二人の子どもにおなかいっぱい食べさせてくれたのです。

そのまま6週間くらい経って、おじさんが安全区からやってきたのです。6週間目に、安全区の責任者が、「もう日本人は人殺しはしないようです。ですから、外に出てもいいです。家族を探しに行ってください」と言ったんだそうです。おじさんは二人の女の子が生きていて、老人施設にいるらしいと聞いてやってきたのです。私は怪我だらけで歩けなかったので、おじさんは私を担いで安全区に行きました。安全区の責任者はおじさんの報告を聞いて、すぐさま人を派遣して私の家まで写真を取りに来たらしいですね。

おじさんには奥さんと子どもがいて、奥さんは妊娠しているので、とても私と妹を食べさせることができなくて、私たちは中国の孤児院へ送られました。私はあるドイツ人のところに連れて行かれました。そのドイツ人は、ドイツに帰るときに、私を連れて行こうとしましたが、おじさんがダメだと言いました。父の血筋は私しか残っていないのですから、私を中国に残しておきたかったのですね。そのドイツ人はラーベという方ですが、ラーベは、私の家の前でたくさん写真を撮ったのです。そのたくさんの写真を私のところに送ってくれました。ラーベは毎日日記を書く習慣もあって、日記の中でも私のことを書いていたようです。写真を撮ってくれたのはアメリカのマーチンと言う方で、60年代に、彼の息子がカメラを南京大虐殺記念館に送ってくれて、今もそこに展示しています。

日本軍が1937年にたくさんの中国人を殺して、私の家族もたくさん殺されたのですけど、その後、1998年に、日本の二人の大学教授みたいな右翼が本を出して、私の話を「でっちあげで嘘だ」と言ったのですね。8歳のときに両親が亡くなって、おじいちゃん、おばあちゃんも亡くなって、今までどれくらい苦勞をしてきたか。そういう苦勞をして、泣き尽くしてきたのに、私の話を「嘘だ」と言われたら、私は腹が立って腹が立ってしょうがなくて、失明したかのように目の前が本当に真っ黒になって、そのあと私の目はダメになって、病院でも長い時間と費用をかけて治療をしましたが、今も目は悪いままです。

その後、私はもうこれ以上悪口を言われてはいけないと思い、彼らを南京で起訴しました。松根には2回、東中野に2回、南京の裁判所に4回もかけて起訴したのに、彼らはなかなか南京までやってこないのです。それどころか、彼らは、2005年に、私のことを東京地方裁判所に起訴したのです。東京地方裁判所が南京の裁判所に伝票を送ってきて、私に「サインしてください」と言うのです。私はもっと怒るようになったのです。このままにしておいてはいけないと思い、今回は日本にいて、東京まで行って、あの二人を起訴したのです。日本ではたくさんの友人、ボランティアの援助・支援を受けて、私は6回も東京まで行ったのです。その結果、私が勝訴したのです。しかし、勝訴しても、あの二人が私に賠償金をくれても、あの二人は私と今でも真正面にあったことがありません。

私は今皆さんに問いかけたいのです。上の姉は15歳、下の姉は13歳、私は8歳。昔の女の子は学校には入れず、何もわからなかったのです。国のことや世界のことは全然わかるはずがないのです。字がひとつも読めないのです。なぜ私がこんな苦痛を受けなければいけないのでしょうか。やはり知識がないからではないのでしょうか。今みなさんは大学生です。いろいろな知識を持っています。1949年、私は20歳になりました。中国の毛沢東、共産党が私たちを苦しいどん底から救い出して、私たちを勉強させたのです。毎夜、2時間ぐらい、字を勉強するようになったのです。3年くらい勉強したのです。それで私はやっとわかったのですね。昔は私がどうしてあんなに苦勞したのでしょうか。今皆さんは勉強して知識を持って、自分の国、人々のために自分の文化を活かして使わなければならないのです。皆さんは勉強して、自分の国の繁栄のために、

平和のために貢献しなければならないのです。私は今年 83 歳です。私は文化の知識はないのですが、私は昔のことを話して、私の使命を果たしていきたいと思います。

今の南京は、皆さんもご覧になったように、日本のように地下鉄もありますし、高層ビルもいっぱい並んでいます。それは全部知識によって作り出すことができるのではないのでしょうか。私は今年 83 歳ですが、毎日、新聞を読んだり、いろいろ勉強したりしています。昔の苦痛を忘れようとしても、忘れられないのです。そして、平和のために忘れてはいけなないと、私は、今思っているのです。ですから、みなさんも、いろんなところからやってきたのですが、世界の、各国の平和のために知識を活かして、新しい世界を作ってください。これが私の願いなのです。



夏淑琴さん



夏さんとの交流

4 「南京を思い起こす 2011」プログラムの流れ

笠井綾 MA, MFTI 表現アーツセラピスト
カリフォルニア統合学研究所東西心理学博士課程

2011 年 10 月 5 日から 10 月 8 日、南京師範大学にて、アルマンド・ボルカス氏のファシリテートによる、Healing the Wounds of History (HWH) の手法を用いた対話ワークショップが行なわれた。プログラムの大まかな流れを記録する。筆者はエディ・ユーさんをはじめとする通訳の一人としてサポートし、時にはエクササイズに参加した。一つ一つのエクササイズが参加者に与えた印

象や影響は、参加者の感想やインタビューがこれから分析されなければならないが、ここでは主に自分の受けた印象を交えながら報告する。

Healing the Wounds of History (HWH)

HWH はドラマセラピストのアルマンド・ボルカス氏が、ホロコーストの歴史の遺産を、被害者、加害者の子孫が共に乗り越えるために考案したドラマや表現アーツセラピーの手法を多用する和解メソッドであり、葛藤関係にある様々な集団の対話に応用することができる。HWH では集団トラウマ、トラウマの世代間連鎖、文化や国家のアイデンティティが自尊心に与える影響などの概念が基礎となっている (Volkas, 2010)。このメソッドには和解の 6 つのステップ (1. 沈黙を破る、2. お互いの人間性の確認、3. 加害の可能性に気付く、4. 悲哀の共有、5. 共同の作業、儀式、創作、パフォーマンス、6. 奉仕や創造への変容) が含まれている (Volkas, 2010)。これらのステップはいつも順番に起こるとは限らない。まず、少人数のグループで対話ワークを行ない、その効果をより広いコミュニティと共有するための儀式やパフォーマンスを行なう。今回の試みでは、日中の劇団の協力により、コミュニティと共有する方法のひとつとして、ボルカス氏が頻繁に用いるプレイバックシアター公演が取り入れられた。プレイバックシアターは語り手のストーリーや、観客の声を俳優達が即興で演じるインタラクティブな演劇で、ドラマセラピーの手法としても取り入れられており、共感や理解の媒体となる。

参加者

4 日間を通じての参加者は、主に、歴史学、心理学、日本語を学ぶ南京市の中国人大学生、大学院生、卒業生 10 名、教員 1 名、広州から 6 名、香港から 2 名。中国社会人の参加者らの分野は教育、対人援助、金融、芸術など。日本からは中国人学生 2 名、在日韓国人 1 名、日本人は大学生、大学院生、社会人、教員、研究者ら合わせて約 18 名。日本からの参加者の分野は、心理学、対人援助、経済学、教育、文化人類学、芸術など。他に南京師範大学の教員やスタッフの方々がお忙しいスケジュールの合間を縫って部分的に参加して下さった。二十代の学生を中心に合計約 40 名。HWH では葛藤する二つのグループのメ

ンバーはほぼ半々のバランスになることが望ましいので、参加大学などの協力を得て参加希望者が募られた。南京在住の以外の参加者は、二十数名が師範大学内に宿泊し、宿泊施設と併設の会場でワークショップが行なわれた。

10月5日 プログラム1日目

初日の早朝、南京虐殺記念館に行ったことのない日本からの参加者を中心に見学に出かけた。2009年のプログラムよりもワークショップに長い時間を費やすため、参加者には独自に見学するよう呼びかけた。これで日本からの参加者はほぼ全員記念館を見学してのプログラム参加となった。

午前：イントロダクション

挨拶／歓迎と報告の後、張連紅氏によって南京の歴史についての講義が行われた。そして、講義の合間に、プレイバックシアターの紹介の意味も兼ねて、アクター達が張氏のお話（別章参照）や、それを聞いて参加者が感じたことを、即興で演じて見せた。ここでは特に、中国人の参加者が、前回に参加した時からの感想や、今考えていることを発言し、参加者の対話への積極的な気持ちや、新たな疑問、何かを訴えかけたい気持ち、などが表現され、対話が既に始まっている感じがした。

午後：HWH ワークショップ

ウォームアップエクササイズ

円になって、

名前と動き：名前と動きを使って今の気分や感覚を好きなように表現する。1人が表現すると、全員でミラーリング。自己紹介、体、声をほぐす意図がある。

想像のリレー：想像上のオブジェを、次の人に渡していく。マッチ、金魚鉢から取り出した金魚など。自然に演技と遊びに慣れていく。マッチの火は消えてしまい、金魚は水から出すため、早くまわすように参加者は協力する。時々煙草に火を付ける人や、金魚を落としてしまう人がいて、笑いが起こる。

音のボール：音の出るボールを一人が投げると、投げられた人はまずその音をリピートしながらボールを受け取る。受け取ったら新しい音にして他の人に投

げる。ボールは2個、3個と増えていく。声を出すことやアイコンタクトなど、積極的なコミュニケーションを促す。

列になって、

ここからあそこへ：ソロ：即興の演技や動きや音を使って、一人ずつ好きなように部屋の角から角へ歩ききる。（自発的で自由な表現、他者に見られることに慣れる。）ペア：二人一組で相談することなく即興でシーンを演じながら部屋の隅から角まで歩ききる。（他者と協力しての遊び、即興性）

2重の円になって

30秒シアター：ペアでのロールプレイ。与えられた役を30秒間演じる。

入国審査官／入国しようとする怪しい旅人

校長先生／何かしてかして呼び出された子供

ダイエット中の人／魅力的なデザート

白紙のコンピュータースクリーン／宿題のレポートに行き詰まっている学生

火を吹く竜／騎士

公園で出会ったシャイな4歳児同士

これらを演じることで、葛藤、力関係、ぎこちなさなど、対話に関わるテーマを、想像力とユーモアで演じる。全員が一斉に演じるため、恥ずかしさが薄れる。子供に帰ったように遊びに身を委ねる。言葉が通じない人同士がペアになっていることが多々あるが、表情、動き、声の調子を使ってコミュニケーションがとられていた。

ラインレペティション（台詞のワーク）：ペアで決められた台詞だけを使って、言い方を変えながら30秒間演じ、どのような感情や感覚が浮かび上がって来るかを観察する。

ほしいよ vs だめです

ゆるしてください vs ゆるさない

ごめんなさい vs ひどいよ など

これらは加害者と被害者の関係のテーマにさらに近づく。ストーリーや文脈の一切ない中で言葉を発しているが、様々な感覚や感情が浮かんで来るので、このエクササイズを行なっているグループの様子で、ウォームアップが充分できているか、今の時点でどの程度感覚や感情を感じ、受け入れる準備があるかがわかるように思う。これらのペアワークはパートナーを次々と変えて行なわれる。パートナーを変えるたびに、名前を確認し握手をしてもらう。このワークの後、「部屋を歩き回って、まだ一緒にワークをしていない人と握手をして名前を確認してください。」という指示が出された。



ペアワーク

ソシオサークル（社会の輪）：輪になって、テーマに即し自分にも当てはまる事実を一人が開示する。自分にも該当すると感じた人は一歩前に出て内側に輪を作り、お互いの目を見て承認し合う。共通の体験を持っている事を確認し合う。該当してもそれを知られたくない人は、動く必要はない。

親が兵士だった人
祖父母が兵士だった人
戦争体験を両親や祖父母から直接聞いた事がある人
敵だった国の相手と付き合っている、結婚している人
敵だった国の友達がいる人
差別を受けた事がある人

このワークの後、小グループで、これまでのエクササイズで感じた事をシェアしてもらった。HWHは通常25名くらいまでのグループで行なわれるが、今回は40名での試みだったので、小グループでのシェアが多く取り入れられた。日中に堪能な7～8名の参加者の助けがグループディスカッションを可能にした。

記憶のオブジェ

更にテーマに近づく。参加者には自分とワークショップのテーマの関係について象徴するものを探して持ってくるように伝えてあった。何を持って来るかを考えることが、自分とテーマを関連づけるウォームアップになる。持ってきたものとそれにまつわるエピソードを小グループになってシェア、その後大きなグループで、ひとり一言で品物を紹介し、カラフルなスカーフで彩られた祭壇に供える。これらは最後の日まで展示しておく。参加者が持参したものを一部紹介すると、戦争世代の祖父母の写真、戦争のメモリアル切手、戦争について知るきっかけとなった歴史の教科書、漫画、本、写真集、新聞記事、兵士だっ



記憶のオブジェ

た何世代も前の高校先輩についての記事、教科書問題に関わっていた教員の写真、などがあった。このエクササイズを通して、それぞれがストーリーと顔をもつ個々であること、私達の世代が受け継ぐ歴史の遺産が意識化され始める。



シェアリング

10月6日 プログラム2日目

最初の1時間は1日目を振り返り、昨晚見た夢や、今朝持っている感覚、感情、イメージについてシェアする。それをプレイバックシアターのメンバーが、即興で演じて見せることで、グループでの共感を試みた。シェアされたことのいくつかを紹介しよう。

日本人女性：戦時中フィリピンでトラックの運転手をしていた祖父の夢を見た。祖父の運転するトラックに私も乗っていて、自分の街を走っているが、祖父が行き先を良くわかっておらず、運転も下手な気がするので、自分が助手席から身を乗り出すようにハンドルを握って運転しようとしている。

これは実は筆者がシェアした夢だ。夢を見た直後は客観的になれず意味が解らなかったのだが、プレイバックを見てから、意味を直感的に感じる事ができた。私は戦争の歴史という祖父のトラックを受け継いで、自分の運転の仕方、祖父達が作ろうとしていた未来とは別の未来に向かおうとしていると感じた。

中国人女性：南京に来てから虐殺記念館を見学し、その夜夢を見た。自分は廃墟にいて、それは白くて丸いドームのような場所で、周りには木が生えているが、とても寂しい感じのする場所なので、すぐにその場所を立ち去る。

中国人女性：落ち着いて冷静な感じ。自分の体の中にたくさんのものが詰められていて、それが丸くなって熟れたザクロのような感じがする。それが成熟して爆発しようとしている。この女性は今回が3度目のワークショップ参加である。このプレイバックを見てから彼女は「爆発と言ったけど、そういう感じではなくもっと静かな感じ」と気付いた。

ボルカス氏は、このようなエクササイズについて、「史実を見るだけでなく、私達がそれをどのように吸収し、自分の体の中でどのような感覚、感情、イメージとして保持しているかを見るためです。」と解説した。プレイバックは、イメージによる共感を促し、語り手が感覚、感情、意味をより鮮明に掴んだり、他者に伝えたりする助けとなる。他の参加者はどのような想像や感覚を持ったのだろうか、これからまた聞いていきたいと思う。

この後、夏淑琴さんに会場に来ていただき証言を伺った。（証言の内容は別章参照）お話を聴いた後、参加者の数名が夏さんの前に置かれた椅子に座って、彼女に気持ちを伝えた。日本人からの参加者は謝罪の気持ち、夏さんのお話を忘れない決意、自分周りの人に伝える決意、中国人参加者は夏さんへの敬意など、それぞれが思ったことを伝え、夏さんはそれを頷きながら受け取ってくださった。夏さんは対話の中で「あなた達は悪くありません。悪いのは軍国主義だった政府です。」と言い、私達若い世代が交流することを望んでくださっていた。このことに中国人も日本人も深い感動と感謝を感じたばかりでなく、交流する事へのモチベーションが高まったのではないだろうか。

午後：HWH ワークショップ

アイデンティティーのワーク 私の名前は～です。私は～人です。

ボルカス氏は「自分の国の歴史は、自分が自分をどう感じるかに影響を与えているので、それを見ていきます。」と説明した。参加者の前に立って、自分の名前と国籍を言い、自分の内側にフォーカスし、どのような感覚、感情、イメージがあるかに気付く。何度か言ってみたり、別の言語で言ってみたりしてもよい。いくつかの異なる気持ちがあることに気付く。今回は広州出身の女性

と、日本人女性、香港生まれの男性がこのエクササイズにチャレンジし、どの参加者も国籍を名乗ることに対するアンビバレンスを感じ、また名乗る事で様々なエピソードや感覚が湧くようだった。その後小グループに別れてエクササイズを行ない、感じた事をシェアした。

椅子のワーク

日本の椅子、中国の椅子を向かい合わせて置き、誰でもそこに座って、集合的な声を代弁してもよい、というワーク。ボルカス氏は、「これをするのは少し怖いと感じるかもしれませんが、これまでのワークで私達は絆を築いてきました。だけど心の奥にある様々な気持ちを表に出さなければ、本当の和解には至りません。」と説明し、ファシリテートした。このワークでは国籍を問わずどちらの国の椅子に座ってもよく、日本人が中国の役を演じたり、中国人が日本の声を演じたりしていることが印象的であった。最初は一人ずつ椅子に座って、日中国の対立する声が表現されることから始まり、教科書問題などがあげられた。そして後半には日本人が謝罪をし続けるのに対して、中国が日本政府からの謝罪を求め続け、日本人はいつまで謝罪や罪悪感といった気持ちを持ち続けなければならないのかという疑問とそれに伴う怒りや無力感が浮上してきた。同時に中国側からは、日本人に対して「鬼」というイメージが早く歴史から消えてしまうことを願う声や、個人の謝罪を受け入れ、許したいという声、また日本側からは、もっと中国人の怒りの声に耳を傾けたい、政府による共同の教科書が作られることを願う声などが聞かれた。

このエクササイズの後、それぞれ演じていた集合的な「国」の役を払い、輪になって一人一単語ずつシェアして終わった。2009年の試みの時にはこういった率直な声の交換を行なうには機が熟していなかったと思う。ボルカス氏の言うように、2009年は「せっかく築いた絆が切れ、再び断絶が起こるのが怖い」と思い、今回はリスクを冒しても率直な対話をするための下地ができていたのかもしれない。



右から笠井さん、ボルカス先生、ユーさん



ストーリーのシェア



椅子のワーク

10月7日 プログラム3日目

午前：まず参加者のチェックインから始まった。前日のワークが印象深かったため、前日のワークで表現し切れなかった声を聞く所から始めた。ある中国人男性が「政府が謝罪しない限り、今でも日本人に見下されていると感じる」というのに対して、「日本人としてこの問題に長年取り組んできたのに、それに反対する右翼がいる。どこまで謝罪すれば終わるのか、複雑で悲しい気持ちになる。」などのシェアがあった。そこから別の日本人男性が米国で体験したエピソードを語りはじめたので、ボルカスはプレイバックシアターを使って個人のストーリーを共有する場を提供した。そこで三人のストーリーがプレイバックされ、共有された。（宗像佳代氏のレポートを参照）

午後：朝の時間はシェアリングとプレイバックシアターで殆どの参加者が長時間座っていたので、午後は体を動かす事から始めた。ウォームアップにまず「名前と動き」を行った。そのあとペアになって全員で次のようなエクササイズを行なった。

インタラクティブな彫刻：ペアになり A さんがあるポーズをとると B さんはそれに参加する形で対するポーズをとる。するとまた A さんが、B さんの形に対するポーズで参加する、ということを繰り返す。

贈り物：A さんがある大きさや重量の想像の贈り物を B さんに渡す。B さんは即興でそれが何であるかを言い、感謝する。「まあ、すてきな〇〇なこと。どうもありがとう。じゃあ私からも。はい、どうぞ！」と今度は別のサイズと重さの贈り物を A さんに手渡す。A さんは大きさや重さしかわからないそれを受け取って、「まあ、素敵なお〇〇なこと。じゃあ。。。」と繰り返す。

シーンを演じる：

登山：二人で難しい登山をしているところをペアで1分間演じる。

遭難：飛行機がアマゾンに墜落してジャングルをサバイバルしているが、お互いに嫌気がさしている場面を1分間演じる。

おとぎ話：ペアで即興のおとぎ話を作る。Aさんが、「昔々ある所に。。。｣と話し始めてしばらくすると「交代!｣と声がかかり、今度はBさんが「そして～」と、Aさんが話をやめた所から話をつくる、という繰り返し。

おとぎ話を演じる：今度は語っている人が同時に動作も付け加えながら同じようにおとぎ話をつくる。

アレゴリー：日本人と中国人が癒しの旅に出た。そして幸存者、怒っている中国人の集団、知恵のある賢者、揚子江などが登場するおとぎ話を、二人で交代で演じながら作り上げる。

これらは、このワークショップのテーマで私達が体験している「葛藤」と「歴史」という深刻なテーマにも、再度心と体をほぐして、遊び心と想像力を持って取り組むために導入されたエクササイズだったように思う。



ペアワーク

アイデンティティのワーク

メッセージの地図（アイデンティティの解体と構築）

私達のアイデンティティやお互いにたいするイメージは、家族、学校、友人、地域コミュニティ、メディア、インターネット、政府、書籍などから常に様々なメッセージを受け取って形成されている。どこからどのようなメッセージを取り入れてきたのか、それが自分にどんな影響を与えているのか、実際に地図を書く事によって解き明かし、意識化する。意識化することで、ネガティブな

メッセージからの束縛を解いたり、様々なメッセージと対話したり、取捨選択をする事も可能になる。また、一人の地図をグループで再現し、その人の地図に出て来るキャラクターを演じることで、共感的理解を促す。今回は中国人のメッセージの地図をみんなで再現した。日本で生まれ育った母が戦争時代に日本に「チャンコロ」と差別を受けるようになり、やむなく中国に帰国したが、今度は中国で差別を受け、娘であるその女性も中国人でありながら「日本鬼子」と差別された。それでも日中友好の架け橋になりたいと長年教育に携わってきたというストーリーの、メッセージのマップだった。ボルカス氏のサイコドラマ的なファシリテートによって、彼女はメッセージのいくつかと対話した。参加者らはこのストーリーの地図を身を持って体験することによって、彼女に共感をしていただろう。このワークの後、みんなで感じた事をシェアし三日目のワークショップを終了した。



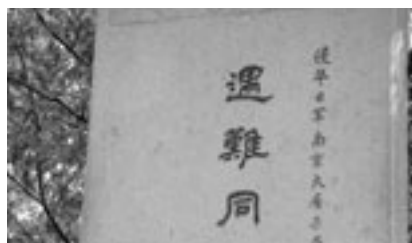
グループでのシェアリング

三日目の夜には、ワークショップ参加者でもある、中国のフレンズ・プレイバックシアターと日本のプレイバックカーズによる共同公演が行われた。(宗像佳代氏のレポートを参照)

10月8日 プログラム4日目

午前：追悼式

2009年同様、揚子江河岸の燕子廟の記念碑で共同の追悼の儀式を行った。前回同様中国人と日本人がペアになって追悼することに参加者の賛同を得た。まず中国人と日本人がペアで記念碑に献花、追悼の祈りを捧げ、お互いの証人となる。その後、中国人のグループ、日本人のグループ、そのどちらでもない人の小さなグループがそれぞれ追悼。みんな心を込めて追悼や謝罪の気持ちを表現し、厳粛な気持ちで犠牲者の冥福を祈った。その後、短い時間、公園内を散策した。バスの時間が近づいても、揚子江が見える高い場所でみんなが楽しそうに記念写真を撮り合っていたのが印象的だった。



追悼式

午後：

謝罪のワーク：Please stay/I have to go（行かなくちゃ／行かないで）という台詞を繰り返すウォームアップをした後、ひどいよ／ごめんなさいという台詞の繰り返しから、即興でシーンを演じ始める。色々なシーンがあり、ユーモアの中で演じられていたが、エクササイズからどんな洞察を得たかをペアで話し合ってもらった。その後ボルカス氏は謝罪の7つのステップについて解説した。（破壊、承認、責任、謝罪、許し、修復、誓い）そのステップをペアで彫刻にするワークを行なった。

椅子のワーク：ボルカス氏は最後にもう一度、中国と日本の椅子のワークを行った。椅子に座って両国の表向きの対立の声を表現し、それから椅子の後ろにまわって、傷ついた子どもの声を表現した。中国からは、痛みを理解されていない、謝罪されてない、という声。日本からは、人から利用されたくない、弱い所をみられたくない、怖い、どうすればいいかわからない、という集合的な戸惑いや傷つきの気持ちに再び焦点が当てられた、そういった声があるのを理解した上で、中国から日本からお互い何を必要としているかを表現し、確認し合うことが促された。最後に参加者達は思い思いに握手や抱擁をしていた。（このワークの意図や詳細はボルカス氏のレポートに記されている）

希望の木：最後にはみんなで大きな円になって座り、エディ・ユー氏のファシリテートで紙が配られ、そこに希望や祈りを書いて、ひとり一人読み上げ舞台の上に設けられた木に短冊のように吊るしていった。

手短ではあるが、ここでは感想やレポートに出て来る台詞や感情がどのような流れのなかでどのようなエクササイズによって引き出されたのか手掛かりとなるよう大まかな報告をした。また数ヶ月を経た時に、このワークショップが参加者のひとり一人にどのような意味があったのか、インタビューをしてみたいと思っている。張氏、村本氏、ボルカス氏を始めとして、今回関わった全ての人々に感謝の気持ちを捧げます。限られた紙面で皆さんのお名前を書けない事をお許しください。この集いに参加できた事を心からありがたく光榮に思います。

Volkas, A. (2010). Healing the wounds of history: Japanese and Chinese cultures facing the legacy of the Nanjing Massacre. In K. Muramoto (Ed.), *Generational transmission of war trauma and efforts for reconciliation: International seminar – Remembering Nanjing 2009* (pp. 131–156). Kyoto, Japan: Ritsumeikan University Human Service Research Center. Retrieved from http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html



謝罪のワーク



希望の木



クロージング